



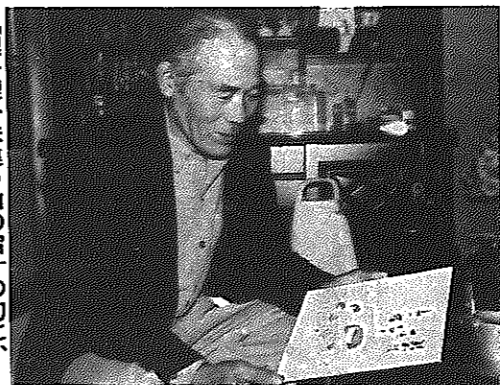
ん
いちば

身近な自然を描き続けて四十年

坂井 勇さん (横垣・農業・58歳)



色紙1枚描くのに5分程度。大きなものは3日くらいで仕上げられる



「鯉料理一味道う山の宿」の句に、きのこの絵が...

横浜の軍需工場で働いていたころ、通った歯医者さんが俳画の先だっただけがきっかけで、俳画を学んで描くようになってから四十年。横垣で梨や稲を作る坂井さんは、仕事に支障のないように、趣味として俳画を描き続けています。

「野の草に一番興味があります。畑に行くときは、道端などをよく観察しています」。人真似をするなど教えた横垣の先生は「野草を描くのは誰もいない。いいじゃないか」と言ってくれたそうです。全国俳画展に二、三回出品し、

「やはり家計が安定しないと趣味を安心してやれませんが、あまり熱中しなかったおかげで、長い間地道に描き続けてこれました」。描くのは野に咲く草花、野鳥などの身近なものがほとんどで、と

「野の草には近所の犬なども描きます。ね。畑に行くときは、道端などをよく観察しています」。人真似をするなど教えた横垣の先生は「野草を描くのは誰もいない。いいじゃないか」と言ってくれたそうです。全国俳画展に二、三回出品し、昭和三十年ころ、露草を描いて入選したこともあります。審査員からは「技術的には今一歩だが、感じがよく出ている」との評を受けたそうです。「人からよく勧められますが、あまり展覧会には出品しません。入選が目的になってしまつと絵心を失ってしまうおそれがあります。技術的なことよりも、いかに絵心を表現して描くかを楽しんでいきます。」

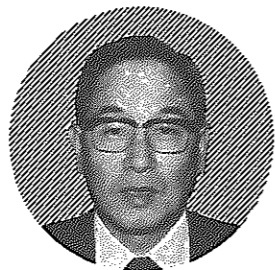
俳画といっしょに俳句も色紙に書きます。字も絵と同じように特徴を出さなければと現在「墨友会」で月二回、書の勉強もやっています。今のところは仕事が忙しいので、と言う坂井さんは「これからは暇が出来たら、車に乗って写生に出たい」と話しています。

市場の代わりの渡し舟

語る人

長沢陽一さん (五三)

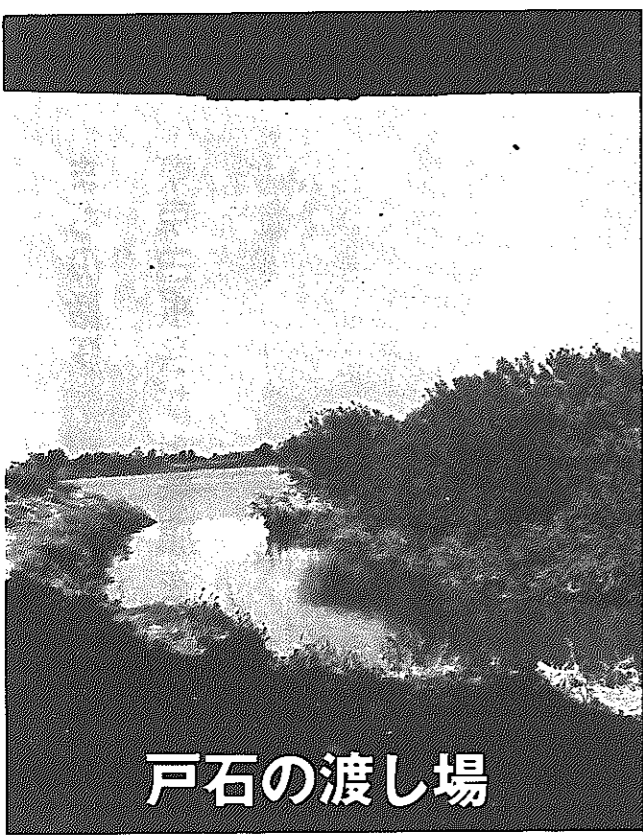
(戸石)



私の思い出
昔のわが街

寛永のころ、新発田藩が市場を許可するというので、小須戸と戸石が有力な候補地となったことが、我が家にある古文書に記されています。

長沢名主が、役人の巡視に失礼のないようにと、往來を掃き清め、家は兩戸を下ろして静かに迎えました。この結果、役人は小須戸が妥当と進言し、今の三、八の市場が許可されたと伝えられています。長沢名主は大変残念に思い、その代わりに信濃川の渡し舟を譲るよう申し込み、小須戸は戸石に渡し舟の権利を与えたそうです。渡し銭は、文で、数多くの人々が渡り市場は繁昌したということです。私が子供のころは、この舟は既になく、木の橋を渡って、よく小須戸へ出かけていました。



戸石の渡し場

小須戸市場起源の由来
寛永の頃小須戸に坂井と長沢の
いふ屋敷あり時に新発田藩の
市場許可の諸議あり許可
すべしとある土地として小須戸
戸石を有力な候補地とされ
藩は公平なる市場を市場許可
すべしと名目を入れて巡視せ
しむる小須戸戸石を夫と通じせ
しむる戸石の渡し場とす

長沢さんの家に残る「小須戸市場3、8起源の由来」

自
根
人
物
伝

★青木兵右衛門

赤波 (旧大郷村)の里正である。寛永(一六二四―四三年)の末、新発田藩の命を受けて、中山、小蔵子、古川(以上旧白井村)、和泉(旧小林村)、上諏訪、能登、七軒、十五間、神屋、小坂(以上旧白根町)、上高井、中高井、北田中、下山崎(以上旧根岸村)、引越(旧鷺巻村)など十六か村を開発して浄楽寺新田と言ひ、寛文四年(一六六四年)に完成した。古川村に神明宮を建立し総鎮守とし、西等巻村に東福寺(初め浄楽寺と言った)を營造して総菩提寺とした。寛文六年九月に亡くなった。

★永野与四郎

白根の荒物商である。明治六年十二月に県から表彰された。与四郎と妻ヨミは共に八十歳、家内三夫婦、孫八人、よく親睦し、家業に励んで儉素、心がけがよいという理由からであった。(以上、中蒲原原郡誌から)



「私の思い出 昔のわが街」欄へあなたの思い出の場所を。連絡は企画財政課広報広聴係へ。